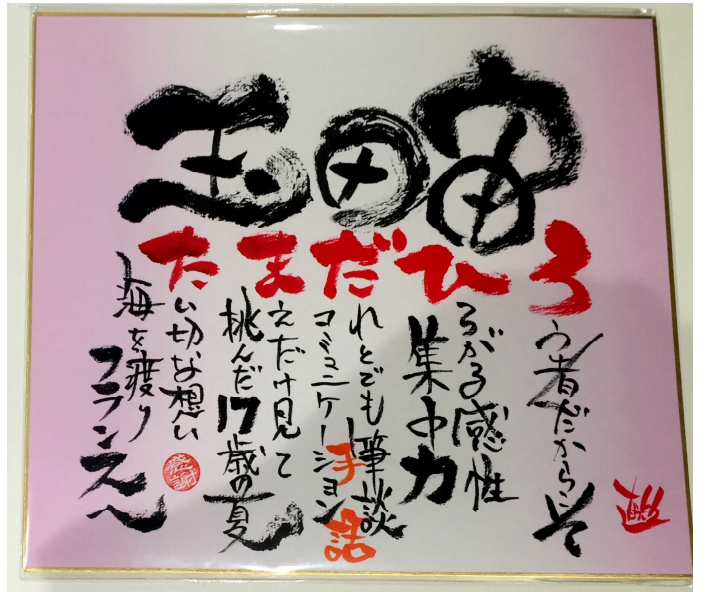




「ひらほく新聞」で検索！
★ホームページ・ひらほくランド★
http://www.hirahoku.com/
☆バックナンバー含め「ひらほく新聞」を
閲覧・ダウンロード可能です！

発行所 読売センター平塚北部 (ひらほく) 山本 直 〒254-0013 神奈川県平塚市田村9-4-32 電話 0463-54-2807



上映会にて、おせつかいで色紙をプレゼント！
この春からは桜美林大学へ進学したイケメン
の玉田君、とても喜んでくれました。

昨春秋、ろう者の野球少年を取り上げた映画をフランスで制作する！という取り組みを知りました。想像することのできない「音のない世界」、しかも硬式の高校野球で活躍という内容に驚愕、すぐに支援させていただきました。その後、多くの支援が集まり、この度映画が完成。先月6月8日、「海を渡る手話の少年『17歳の夏』」上映&トーク 映画完成披露会」に参加してきました。ろう者の方の参加も多く、あふれる感動とともに、初めて知ったこともたくさんあり、ぜひ多くの方に伝えたいと感じました。謹んでご紹介いたします。

聞こえなくてもできる！
を伝えたくて17歳の
ろう者の少年がひとり
フランスへと旅立った。

主人公は、東京都立大森高(大田区)の3年、玉田宙(ひろ)さん。玉田さんは先天性の難聴で、1歳9ヶ月の時に両耳が聞こえないと診断。それでも野球は小学1年から始め、小中学校時代は4番打者として活躍しました。

しかし、皆さんはご存じですか？ろう者学校では甲子園を目指せないことを。ろう学校は高野連に加入できず、硬式野球では大会おろか他校との練習試合もできません。

そして、「聞こえないからこそ、誰よりも集中できたりと有利な面もある」という玉田さんは「どうしても硬式がやりたい」と大森高に進みました。

手話でも会話はできる玉田さんでしたが、当初は部員とのコミュニケーションに苦しみました。そして、身ぶりやグラウンドの土を使った筆談を重ねて、徐々にチームに溶け込みました。



玉田さんのドキュメンタリーの制作は、映画監督を目指す藤原亜希さんが企画。1年間、フランスの大学院で学び映画の道に入り、手話を題材とした作品を撮りたいとフランスのテレビ番組の制作会社に企画を持ち込み、採用されました。

た。手話を選んだのは「言語を越えたコミュニケーションを伝えたい」と藤原さん。
作品を撮るにあたり、耳が聞こえない子どもたちが手話で授業を受ける「明晴学園(品川区)」(後半で紹介)に相談して、卒業生の玉田さんを紹介されてつながったそうです。

映画が伝えてくれることは、ろう者だからこそ国境を越えることができる、アイデンティティーでつながることができると素晴らしいコミュニケーション能力があるということ。
☆上映のあと、玉田君のトーク(手話通訳)より
「国によって、文化によって手話の単語、成り立ちが違うので全く違う手話の表現になりますが、共通点があり、それは視線や顔の表情で表す、伝えるということ。それによって手以外の部分で伝わることに慣れてくると、ますます楽しく面白くなりました。短い期

間だったのでフランス手話をしっかり理解したわけではありませんが、本当に通じ合えたということとはとても良い経験になりました。」

ご存じですか？

ろう者の母語である日本手話をろう者学校では使わないということ。

日本のろう者学校では、昭和8年から手話を禁止し、「聞く・話す」を基本に「聞こえる子に近づける」教育(聴覚口話法)を行ってきまりました。それは現在でも変わりません。しかしろう児はどんなに訓練しても聴覚(聞こえる子)にはなりませんし、口の動きから話の内容を正確に読み取ることが極めて困難で、それがトブラルの原因になることもあります。

海外では20年以上前から手話と書記言語(読み書き)の2言語を習得するバイリンガル教育を行い、確かな成果を上げてきました。そこで、玉田さんご両親たちは、「日本手話」でろう児を教育するフリースクールを設立。2008年4月、構造改革特区を使って、品川区に日本で初めて日本手話で学べる私立ろう学校「明晴学園」を設立しました。「手話で学びたい」

という、ろう者たちの75年間の夢が、ようやく現実のものとなったのです。
しかし、社会において、ろう者の存在や日本手話への理解はまだまだ得られていません。

ほしい未来がないなら、自分たちで作ればいいのか？そんな想いから学校まで作ったBBEDのことを知ってください！

特定非営利活動法人バイリンガル・バイカルチュラルろう教育センター(BBED)は、ろうの子どもが日本手話と書記日本語(読み書き)の2言語で教育を受けることを支援しています。更に、従来の「聞こえない人」というマイナスの価値観ではなく、「手話で話す目の人」というプラスの価値観を社会に広げ、ろう児が聴覚と同じように力を発揮することができ、その力が正當に評価される社会づくりをすすめています。

ご存じですか？
一般高校で、ろう者に支援がないことを。

日本の小中学校では、義務教育であり特別支援学級というクラスがあり、そこで公的支援を受けるという教育の場があります。
※※裏面へつづく※※

そして、大学では、障害者に対する補助金があり、それを使ってボランティアがノートテイク・パソコンテイク（先生が話した内容を文字に起こして難聴者に内容を伝える）といった形で支援する仕組みがあります。

ところが、その間にある高校だけが何の支援もありません。高校は義務教育ではない。そして、大学のように自由な運営ができるわけではなく、高校だけが置き去りにされています。

自分たちで作ればいいとBBEDが作った明晴学園は、幼小中の一貫校です。一般的に、ろう者は公立高校に入ってもいいのですが、情報保障、支援がなにもないので自分たちで用意しなければなりません。私立高校に至っては受験すらできないのが現状です。

そして、一般の教室で文字通訳やノートテイクは難しい状況のなかで、どうしてもこの子たちに高校の授業を受けさせたいと考えて行きたいのが、「教師の授業の声を遠隔にて文字情報に変える『遠隔パソコン文字通訳』』という授業支援です。

これは授業での先生の声を、聞こえない子が持っているスマートフォンやタブ

レットで拾って、全く違う場所にいる文字通訳ができる人に飛ばして、その人たちが先生の声を文字に変えて、教室の生徒に送り返すという仕組みです。実際には高校では、学内に文字通訳の人たちの場所を作るのは難しいので、自宅でも仕事場でも、どこでもインターネットさえつながれば支援できるという仕組みに創り上げました。

玉田君は明晴学園の一期生ですが、同期に一般の高校に行きたいという生徒がもう一人いました。しっかりとした夢を持って公立高校に進み、玉田君と同じ「遠隔パソコン文字通訳」の仕組みを使って授業を受けました。剣道の東京代表にまでなり話題となった宮坂七海さんです。「音のない世界」で戦う16歳の女子高校生剣士の挑戦」として、一昨年、ロイテルのNEWS ZEROで特集されました。

この仕組みを現在はBBEDが助成金をもらって運営していますが、助成金の期間は、2017年9月までです。これを何とか制度化したいそうです。一般高校へ通うろうの高

校生が負担なく選択できるこの仕組みを確立するために、持続的な運営資金を確保すること、まずは皆さん

んに「ろう」を理解していただくことが重要です。2016年4月「障害者差別解消法」が施行され、合理的配慮の提供が義務化されました。ろうの高校生にとって最適な仕組みを実現するためには、今が行動の時なのです。まずは、多くの聴者が、ろう者のことを深く理解し、広めていただくこと。皆さん、ぜひよろしく願います。

詳しくは、ぜひBBEDの公式サイトをご覧ください。(http://www.bbbed.org) 日本手話を学べる書籍やDVD、無料版のPhoneアプリ「実用日本手話Voice」の紹介もあります。(終)

宇都宮市下岡本町にある小さな神社のさい銭箱から、過去の盗みを謝罪する手紙と三万円入りの封筒が見つかった。小学生のときにさい銭箱から一万円を盗んだことを告白し「後悔と罪悪感でいっぱい」と記してあった。

封筒は先月二十二日夜、地元自治会長の須永正さん(76)ら四人が防犯パトロールで巡回中に見つけた。

手紙では「社会人になってからお金を稼ぐ大変さを実感した時に、おさい銭を盗んだことを思い出した」と説明。「一万円を入れた方はどんな願いをこめて入れたのだろうと思うのです」と後悔の念をにじませ、「十年の歳月が流れてしまったことをふまえ三万円を納めます」と結んでいる。

神社の責任役員を務める須永さんは「若者の思いにじんときた。地域の子だったのかもれないが、真つすぐに成長してくれた」と感慨深げ。今、神社には、須永さんから手紙の主に向けたメッセージが張られている。

「あなたの善意は社会福祉協議会に寄付させていただきました」

このお話は、先月号で記事をご紹介した「みやざき中央新聞」中部特派員の山本孝弘さんのフェイスブック投稿からです。図書館で見つけた6年前の中日新聞の記事だそうです。「お天道様が見ている」。胸に刻みましよう。(終)



腹中書あり

「腹中書あり」は安岡正篤師の座右銘「六中観」にある言葉である。

身心を養い、経綸(国家の秩序をととのえ治めること。また、その方策)に役立つ学問をする、という意。

腹中に書を持つ生き方をした一人の女性のことを、

報『田覚』に書かれている。A子さんは若い身でがんになった。辛い闘病生活。

その中で、病気を治すには体の治療だけでなく心も治さなければ、と思いつつ。そして手にした『致知』。

中でも横田管長の連載に惹きつけられた。「坐禅の要領は、ほんの一時でも過ぎたことは気にしない、これから起こることも気にしない、この二つ」ともすれば手術で失った体の一部を思い煩い、これからの不安にとらわれがち

なA子さん。そんな時、横田管長のこの簡潔な言葉に出逢い、いま現在をしっか

り生きよう、こうして生きていることに感謝しよう、と思いつくことができたという。

「自分はお坊様のようにお寺で修行はできないが、病

気とともに日常生活の中で

生きている感謝、生かされている感謝を学ぶために、自分なりの授業をしたい」という手紙をA子さんは書き送ってきた。横田管長は「いま置かれている状況の中で、日常の生活の中で、感謝をもって生きることこそ最大の修行です」と返事した。

以来、手紙のやりとりが何度かあった。その中で、A子さんの容体が優れず実家に戻ったこと、まだ幼い子供がいることなどを横田管長は知ったという。そして、このように書かれた手紙がきた。

「この病を得なければ、私は心や人間、自分を高めようと読書や勉強をすることはなかったでしょう。悪いと思われても、そのかげにはよいことも隠されているのです。この間教会の前を通りかかったら、へんの父よ、どんな不幸を吸っても吐く息は感謝でありますように」という看板を見つ

け、心に刻みました。病気で苦しんでも、いま私は生きています。それがすべての答えだと思います」

それがA子さんの最後の手紙となった。身内の方から亡くなったと横田管長が知らされたのは、それから間もなくだった。

大きな試練の中で『致知』に出逢い、師を見つ、辛い日々を精いっぱい生き

た人の人生は、腹中に書を持つことの大事さを私たちに教えてくれている。

愛読誌 月刊『致知』
2016年7月号特集より

いよいよ今年も夏の甲子園を目指す球児たちの熱い季節がやって来しました。愛読紙、みやざき中央新聞6月6日号、株アスコム柿内尚文編集部長の講演会記事に、自社で出版した松岡修造さんの書籍『松岡修造の人生を強く生きる83の言葉』の紹介がありました。昨年の夏の甲子園で秋田商業高校が80年ぶりにベスト8に進出。その原動力の一つがこの本だったと。チームのキャッチャーが県大会の前にこの本を見つけてみんなで回し読み。その結果、県大会で優勝し、甲子園でも宿舍に本を持ち込み、朗読会を開いて、みんな気持ちが高めたり精神的な部分を鍛えたりしたことがプラスになったのだろうという。まさに『腹中書あり』。一冊の本との出会いが人生を変えました。

今年も身近に、応援する選手がいます。全ての球児たちの悔いの残らない完全燃焼を祈ります。

「崖っぷちありがとう! 最高だ!」(修造語録)

編集後記

いよいよ今年も夏の甲子園を目指す球児たちの熱い季節がやって来しました。愛読紙、みやざき中央新聞6月6日号、株アスコム柿内尚文編集部長の講演会記事に、自社で出版した松岡修造さんの書籍『松岡修造の人生を強く生きる83の言葉』の紹介がありました。昨年の夏の甲子園で秋田商業高校が80年ぶりにベスト8に進出。その原動力の一つがこの本だったと。チームのキャッチャーが県大会の前にこの本を見つけてみんなで回し読み。その結果、県大会で優勝し、甲子園でも宿舍に本を持ち込み、朗読会を開いて、みんな気持ちが高めたり精神的な部分を鍛えたりしたことがプラスになったのだろうという。まさに『腹中書あり』。一冊の本との出会いが人生を変えました。

今年も身近に、応援する選手がいます。全ての球児たちの悔いの残らない完全燃焼を祈ります。

「崖っぷちありがとう! 最高だ!」(修造語録)